

## § 0 調査の目的と今までの調査

### §000 調査の目的

日本国民として、これだけはどうしても読んだり、書いたりできなければならないと考えられる、現代の社会生活を営むうえに必要な文字言語を使う能力を調べること。

### §001 調査を必要とする理由

1 日本国民の読み書き能力は、世界でもかなり高いものであるとされてきた。この説は、日本での義務教育の普及率や就学率と一般的な書物の出版率との高いことから想定され、支持されていた。

i 過去2世代以上にわたって4年ないし6年間の義務教育が施されてきた日本では、たしかに、大衆の読み書き能力はユネスコ (UNESCO) のいう 'fundamental education (基礎的教育)' の程度よりずっと高いであろう。これは文盲の構造を分析することによって明らかになるであろう。

ii しかし、義務教育で得た読み書き能力が、社会に出てそのままひくくならないものかどうか、また、日本国民の読み書き能力を教育レベルによって推測して間違いないかどうか、という問題がある。

iii 一般的な書物の出版率が高くても、それらのものが一般大衆に読まれ、理解されているかどうか、という問題がある。いいかえれば、現代の文字言語が社会生活の通達 (communication) の道具として役立っているかどうかということである。

2 しかしながら、一方、明治維新以来“国語国字問題”として論じられてきたことは、日本国民の読み書き能力は正常な社会生活を営むのに不十分であるということである。日本では義務教育の普及率はほぼ最高の限度に達し、言語 (文字) 教育は学校教育のなかで、もっとも重みをかけられてきたもののひとつであるのに、なお、国民の読み書き能力が、まだ正常な社会生活を営むのに不十分であるとすれば、改革すべきものは文字言語そのものである、ということになる。これが“国語国字問題”を論ずる人たちの共通した、根本的な意見である。しかし、国民の読み書き能力が、正常な社会生活を営むのに不十分であるということが、科学的に証明されたことは一度もなかった。

## § 0 調査の目的と今までの調査

3 いわゆる“言文一致”の運動によって、1887年(明治20年)ごろから、書く言語と話す言語との違いが小さくなり、一般大衆にとって、文字言語はいっそうたやすく使うことができるものとなったはずである。しかし、この運動は不徹底に終り、殊に、模範となるおおよけの文書(届、通達、憲法、勅語など)が“文語文”であったために、少なくとも太平洋戦争が終るまでは、‘popular language use (一般大衆の言語の使用)’ということ、文字言語についてしんげんに考えたことはなかった。また、たとえ、“話すとおりに書く(言文一致)”としても、その文字(漢字)を読んで理解することは、大衆にとってむずかしいことであった。つまり、日本では、大衆の文字言語と専門家の文字言語とは、ひどくかけ離れてしまっていると考えられるのであるから、これについて調べてみる必要がある。

4 日本での国字改革のもっとも穏当な(国民にとってもたやすく受け入れられる)手段は“漢字制限”であるといわれている。そして、この手段はたびたび試みられたが、太平洋戦争が終るまで成功しなかった。戦争後、1946年11月に公布された漢字制限案、すなわち、当用漢字表<sup>1)</sup>は多くの新聞、雑誌やおおよけの文書にも採用され、実行されているが、いったいこの程度の制限が十分にされれば、大衆にとって読み書きは楽になるものであろうか。もし、漢字をこれだけ制限しても、大衆の読み書き能力が高まらないならば、漢字の制限とその用法がもっと合理化されなければならないということになるろう。

1) 当用漢字表は1946年11月16日内閣告示第32号によって公布された。漢字の数は1850字。なお、現代かなづかいは同日内閣告示第33号により公布。

5 日本国民の読み書き能力に及ぼしている言語的要因の影響のうちで、漢字の“書取り”のそれがおそらくもっとも大きいであろうと思われるが、それには、その影響のしかたや程度を詳しく調べなければならない。

6 今までの日本の義務教育でおこなわれた国語教育は、内容からいっておもに文学教育であり、形式からいえば文字教育にかたより、ときには精神教育の手段にもされて、現今の社会で必要な言語技術を教育することがおろそかにされてきた。そういう国語教育を受けた大衆は、義務教育を終えただけでは、現代社会で正常な生活を営むのに必要な言語技術を持っていないであろうと考えられる。

## §002 調査の結果は何をあたえるか

1 調査の結果はつぎのことについて数値的資料をあたえる。

i 読み書きの能力のいろいろな型の比較。特に、漢字が読み書き能力にどの程度の影響をあたえているか。

ii 文化的要因(cultural factors)が読み書き能力にどの程度の影響を及ぼし

ているか。

iii 義務教育でおこなわれる国語教育が、社会に出て正常な言語生活を営むのに必要な程度および型の能力をあたえているかどうか。

2 調査の結果はつぎのことについて判断する資料をあたえる。

iv 日本国民は、正常な社会生活を営むのに望ましい読み書き能力を持っているかどうか。

v ‘mass communication (マス・コミュニケーション)<sup>1)</sup>’ とその ‘media (メディア)<sup>1)</sup>’ とは活用されているかどうか。

vi 現代日本の正字法 (orthography)<sup>2)</sup> は十分役立っているかどうか。

1) mass communication および media の定義については §003.1 を見よ。

2) 正字法とは、ある国語としての、語のどういう部分をどういう文字で書くかという、あるきまった文字の使いかたをいう。

### §003 Literacy (リテラシー) の概念

#### §003.0 Literacy の定義

literacy は常識的に、‘読んだり書いたりする能力’ というように考えられているが、そのような定義では科学的には不十分であると思われる。しかし、今までに literacy が科学的に定義されたことはない。

1 literacy という概念には、ほかの読み書き能力と比較し、対照することのできるある度合、ある型の能力ということがふくまれている。literacy は多くの可能な能力のうちで、調査者によって最低限度として示される能力と考えられる。すなわち、望ましい読み書き能力の最低の限界である。

2 literacy は、社会生活を正常に営むのにどうしても必要な度合、および型の文字言語を使う能力である<sup>1)</sup>。もっとも、“正常な生活”は集団および個人によってまちまちであろう。したがって、農民にとって literacy であるものは必ずしも政府の行政官にとって literacy であるとはかぎらない。しかし、このように定義された literacy を實際上テストすることはできない。

1) このように定義された literacy は、したがって、この本では「読み書き能力」とは厳密に区別して使われている。

#### §003.1 Literacy と Mass Communication

一般大衆の、日常生活に必要な思想および情報のとりかわしを ‘mass communication (マス・コミュニケーション)’ と定義する。このとりかわしの手段のうち、文字言語でのおもなものは、i 新聞、ii 届および通達、iii ビラ、iv 個人的な手紙、である。

このような文字言語を ‘mass communication media<sup>1)</sup>’ と定義する。したがって、literacy は mass communication media を理解し、これを使う能力である。

## § 0 調査の目的と今までの調査

1) media (なかだち) の単数は medium であるが、この本では単数、複数を問わず media を使う。これは音声などでもいいが、ここでは文字言語資料にかぎった。

media には特殊な目的に使われたり、かぎられた集団で使われるものもある。これを '特殊な media' と定義する。組合の教育資料、学問上の著書、商店の金銭上の記録、文学上の作品などはそのたぐいである。

読み書き能力を測定するには、'特殊な media' でなく、'mass communication media' によるべきである。読み書き能力はこういう 'mass communication media' を使う能力だからである。いいかえれば、読み書き能力は 'mass communication' の効果を測定する物さしである。

いっばんに 'mass communication' の効果はつぎの四つの条件から生まれる。

- i 道具として使える media が存在すること。
- ii この media による、大多数の人人にたやすく理解できる文字言語。
- iii この文字言語を理解できる能力を、義務教育のあいだにつけるような国語教育の組織。
- iv この能力の発達を妨げない一般的な文化組織 (cultural system)。

われわれは i について、そのような media を持っているといい得るが、ii 以下については、はっきりしたことはいえない。こんどの調査は、これらの条件を明らかにするものである。

### §01 今までの調査

#### §010 諸外国での調査

諸外国でのこの種の調査について、われわれは、今までのところ、詳しい資料を持っていない。しかし、科学的な、また大がかりな調査はまだどこでもされていないようである。以下、われわれにわかっている、外国でのおもな調査をあげてみよう。

##### §010.0 アメリカ合衆国での調査

特にアメリカ (以下アメリカ合衆国をアメリカと略していう) では、20年か30年ぐらいまえから、読み書き能力の調査に対する一連の技術が発達した、といわれているが、実際的な成果についての発表を手に入れていないので、詳しいことはわからない。この研究は、主として文盲を発見し、これに読み書き能力をあたえるため、というよりは、むしろ言語教育を評価し、かつ指導するために起こってきたということである。

アメリカでは1940年の国勢調査にあたり、literacy が、テストによらず、うけた教育レベルに応じて測定された。すなわち、小学校の5年級を終えた者は、だれでも、そのことだけで literacy を持つ者と考えられた。したがって、これは科学的な調査ということとはできない。

太平洋戦争がはじまってから、アメリカ陸軍は召集兵の literacy 調査を大がかりにしたようであるが、その詳しいことは発表されていない。

また、1950年には、われわれのこの調査とおなじような企画の読み書き能力調査をするということも耳にしたことがあるが、確かなことはわからない。

§010.1 ギリシャでの調査

ギリシャでは、1946年に一種の読み書き能力調査がおこなわれた。これは、国王問題に関する国民投票に使う選挙人名簿を整備するために必要な、国民についての多くの知識を得ようという目的でおこなわれた調査のうちのひとつである。アメリカとイギリスとによって組織された派遣団が、ジープ、舟、航空機を使っておこなった、<sup>1)</sup> 壮大な sample (サンプル) 調査であった。sampling 比率は 1/500 である。

1) §113.0 を見よ。

この調査の一部が、'American Journal of Statistical Association' (September, 1947) に Raymond T. Jessen, Richard H. Blythe, Oscar Kempteome, W. Edward Deming: On a Population Sample for Greece. (ギリシャのサンプル調査について) として発表されている。

この発表のなかで、つぎの一節は参考とすることができる。

「すべての場合、解答は抽出世帯で得られ、そのまま記入された。たとえば、読み書き能力調査に関しては、ある人がいずれかの言語について読み書きできるということがわかれば、特にテストをしなかった。」

結果はつぎのように表示されている。

| 年 齢   | 性 | 合 計   |       | 読み書き能力がある |       | 読み書き能力がない |       |      |
|-------|---|-------|-------|-----------|-------|-----------|-------|------|
|       |   | 数     | %     | 数         | %     | 数         | %     |      |
| 8~13  | 計 | 984   | 100.0 | 774       | 78.6  | 210       | 21.4  |      |
|       | 男 | 505   | 100.0 | 410       | 81.2  | 95        | 18.8  |      |
|       | 女 | 479   | 100.0 | 364       | 76.0  | 115       | 24.0  |      |
| 14~19 | 計 | 1,000 | 100.0 | 864       | 86.4  | 136       | 13.6  |      |
|       | 男 | 479   | 100.0 | 432       | 90.2  | 47        | 9.8   |      |
|       | 女 | 521   | 100.0 | 432       | 82.9  | 89        | 17.1  |      |
| 20~39 | 計 | 2,205 | 100.0 | 1,757     | 79.7  | 448       | 20.3  |      |
|       | 男 | 1,056 | 100.0 | 966       | 91.5  | 90        | 8.5   |      |
|       | 女 | 1,149 | 100.0 | 791       | 68.8  | 358       | 31.2  |      |
| 40~   | 計 | 2,030 | 100.0 | 1,075     | 53.0  | 955       | 47.0  |      |
|       | 男 | 1,002 | 100.0 | 762       | 76.0  | 240       | 24.0  |      |
|       | 女 | 1,028 | 100.0 | 313       | 30.4  | 715       | 69.6  |      |
| 合 計   |   | 6,219 | 100.0 | 4,470     | 71.9  | 1,749     | 28.1  |      |
|       | 男 |       | 3,042 | 100.0     | 2,570 | 84.5      | 472   | 15.5 |
|       | 女 |       | 3,177 | 100.0     | 1,900 | 59.8      | 1,277 | 40.2 |

§ 0 調査の目的と今までの調査

しかし、どのような調査方法をとったかが明らかでなく、その結果は多少われわれの常識を裏切るところがある。調査の具体的な、また詳しい報告が期待される。

§011 日本での調査

日本での今までの調査は、大きくつぎの三つに分けることができる。

- 1 壯丁教育調査
- 2 カナモジカイの調査
- 3 東京市教育局の読方教育測定

被調査者は、

- 1 はある年度の壯丁、すなわち、満 20 歳の男子のすべてであり、
- 2 は高等小学校の生徒、工員および壯丁の、400 人ないし 2,200 人についての調査であり、
- 3 は東京の小学校の生徒約 9,500 人について調べたものである。

調べられることからは、

年度によって 1 は少しずつ違っているが、漢字の“読み”と“書取り”、語の意味、文法、文章の理解、その他についてであって、かなや数字の読み書きについては調べられていない。

2 はほとんど漢字の“読み”と“書取り”とで、問題の程度は最高度の能力を要求するものといえる。

3 は漢字の“読み”と“書取り”、語の意味、文の意味について、だいたい学習力を調べたものである。

問題の出所は、

- 1 については明らかでない。
- 2 は銀座、新宿の看板および現代の翻訳文からとられた。
- 3 は読本（教科書）からとられた。

採点の基準は、

- 1 は各調査地の担当者に一任したらしい。
- 2 では、漢字の“書取り”については採点基準のための意見調査をしたことがあり、しかも、いったいに点をあまくつけたとのことである。

3 は明らかでないが、採点基準について特別の調査はせず、しかも 2 よりからい点がつけられたのではないかと思われる。

結果は、

1 については、正答数と学歴との相関関係を実人数と%とで示し、問別の正答率を sampling (サンプリング) <sup>1)</sup> で出しているにすぎない。ほかの事項は、1932 年 (昭和 7 年)

以後実施された。

2については、たとえば、漢字の読める率をひとつひとつの漢字について示したり、漢字の“書取り”の正答率を出し、さらに、壯丁と小学校、高等小学校卒業当時の生徒との能力の比較を試みたりした。最後の事項から明らかになったことは、漢字の“書取り”能力は学校卒業後ひくくなるということである。

1) §113 を見よ。

以上の調査に対して、われわれの読み書き能力調査は、つぎのような特長を持っている。すなわち、

1 調べられる者については、日本国民ぜんたいの sample 調査であり、実際に調べた人数も約 17,000 人であること。

2 調べられることがらは、現代の社会で正常な言語生活を営むのに、どうしてもできなければならないもので、最低限度の読み書き能力を要求するものであること。問題の種類も、かな、数字の読み書きをふくんでいること。

3 問題の出所は、約 66,000 語の新聞語の度数調査などにもとづいて、もっともよくあらわれ、それぞれの記事にとって key (キイ、かぎ) となるような語 (以下 keyword (キーワード) という) をとりあげたこと。

4 採点の基準はカナモジカイとおなじ程度か、またはそれ以上にあまくしたること。漢字の書取りについては特に、正しい漢字の限界についての意見調査をしたこと。

5 結果は、読み書き能力に影響を及ぼす要因、つまり文化的要因、および読み書き能力を調べる手がかり、つまり、かな、漢字、数字の読み書き、語の意味、センテンス・パラグラフの理解などの要因と得点との相関関係、いろいろな読み書き能力の比較と相関関係、および反応の分析など、今までの結果には見られないほど豊富であること。などである。

つぎに、三つの調査のそれぞれについて述べよう。

#### §011.0 壯丁教育調査

壯丁教育調査はつぎの趣旨にもとづいておこなわれた。

「壯丁教育調査は、一般教育特に青年教育に資せんが爲、毎年徴兵検査に際し道府縣壯丁に対して実施する壯丁の教育程度及び學力情况等に関する全國的教育調査である。」(文部省社会教育局：昭和 11 年度壯丁教育調査概況、1 ページ)

この調査の経過はつぎのようである。1905 年 (明治 38 年) (12 月 23 日己省普 33 号) にはじめておこなわれたが、このときは道府県で適宜に問題を作って調べ、本省でまとめたにすぎないものであるが、1925 年 (大正 14 年) (4 月 23 日照普 12 号) には文部省で標準問題を示し、道府県で適宜に実施した。しかし、まだ全国おなじ問題です

§ 0 調査の目的と今までの調査

るところまでは行かなかった。1931年(昭和6年)(3月31日発社82号)になってはじめて全国一本の調査問題を作り、調査事項および調査方法も改めた。なお、それまでは中等学校(在学)以上は調べなかったが、この年度からは原則として中等学校在学または卒業以上の者についても調べることになった。

被調査者は、上に述べたように、原則として壯丁ぜんぶである。すなわち、満20歳の男子についての全数調査である。

問題は、国語とともに修身・公民、算術の三つの種類の教科についてである。国語の問題の種類については、かなの“書取り”、数字の“書取り”、“読み”のようなひくい程度の問題は出されていない。毎年問題の種類、数などは違っている。

採点は各調査地の担当者に一任したらしい。

分析は、正答数と学歴との相関関係を実人数と%とで示し、問別の正答率を sampling によって出しているにすぎない(最後の事項は1932年以後実施)。

調査報告は、1925年から毎年「壯丁教育調査概況」(年度によりいくぶん題名が違う)として文部省社会教育局から発行されてきた。1931年からはかなり詳しい報告が出ている。1938年(昭和13年)度は、心理学者および教育学者の協力のもとに、分析と整理とがされ、学童・生徒の成績との比較など、新しいとり扱いが見られる。1939年以後は軍の秘密を守る必要からであろう、調査報告はおおやけに発表されていない。

つぎに、1936年(昭和11年)度の問題と成績とをひとつの見本としてあげることにする。(原文はたて書き)

「第二部(十分)

問一、次の□の中に片假名を書き入れなさい。

アイウエオ カキクケコ サシスセソ

タチツテト ナニヌネノ □□□□□

マミムメモ ヤイユエヨ ラリルレロ

ワキウエヲ

問二、次の文の——のある漢字の右側に振假名をつけなさい。

水は低い方へ流れて行く

問三、次の文で{ }の中の四つのことばのうち、どれを選ぶと正しい文になりますか。いちばん正しいことばの右側に線をつけなさい。

得がたきものにてても、有用ならぬ物は價なし。例へばこゝに一つの石ありとせよ。それが如何にまれにして、たやすく得られざる物なりとも、用ひやうなれば誰も之を買ふ者なく、したがつて

- 價甚だ高し
- 價甚だ安し
- 價あることなし
- 價すくなし

問四、次の文の中に「かゝるもの」とあるのは何の事か。その答を簡単に書きなさい。

世の出来事を速かに知らんとするは人情の常なり。されば珍しき事件の起りし時、これを記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をりをり興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。されど人智の進歩と印刷術の發達とは何時までもかく單純にして遊戯的なるものに満足すべくもあらず、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に、時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。我が國にて「かゝるもの」の現れたるは維新前後にして、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げたり。 答

問五、次の文の□の中フウケイに漢字を書き入れなさい。漢字は字劃を正確に書きなさい。

我が國の美しい□□や□□な□□ランフは自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。」

以上の成績はつぎのとおりである。(単位%)

| 教育程度<br>正答数 | 學歷なし  | 尋常小学<br>校中退者 | 尋常小学<br>校卒業者 | 高等小学<br>校卒業者 | 実業補習<br>学校後期<br>卒業者 | 青年学校<br>卒業者 | 中等学校<br>在および<br>中退者 | 計     |
|-------------|-------|--------------|--------------|--------------|---------------------|-------------|---------------------|-------|
| 0           | 83.3  | 42.6         | 15.5         | 4.0          | 3.7                 | 3.7         | 0.8                 | 7.8   |
| 1           | 10.8  | 25.8         | 19.4         | 9.5          | 8.1                 | 8.2         | 2.4                 | 11.5  |
| 2           | 3.4   | 17.2         | 24.3         | 20.3         | 18.0                | 17.4        | 10.4                | 19.7  |
| 3           | 1.4   | 9.2          | 20.7         | 27.5         | 26.7                | 25.6        | 25.6                | 24.7  |
| 4           | 0.9   | 4.0          | 14.0         | 25.6         | 27.6                | 27.3        | 36.6                | 23.3  |
| 5           | 0.2   | 1.2          | 6.1          | 13.1         | 15.9                | 17.8        | 24.2                | 13.0  |
| 計           | 100.0 | 100.0        | 100.0        | 100.0        | 100.0               | 100.0       | 100.0               | 100.0 |

問別の成績(平均点数)はつぎのとおりである。

問一、79.1

問二、80.8

問三、50.1

問四、33.1

問五、41.1

つぎに、学力情況(結論)を、もっとも分析の詳しい1938年(昭和13年)度の分

§ 0 調査の目的と今までの調査

について示すと、つぎのとおりである。

「學力情況概括（国語に関係するところだけをぬき書きした）

二. 國語に於ては書取最も成績不良で、文章、語の使用に關しても不良である。併しこれを現に在學中の兒童の學歷に比較して見ると、書取は低下してゐないが、文章、語の使用法については低下が著しい。

三. 學力の情況を學歷に關係さして見ると、こゝに例外なく學力の上るにつれて正答率は向上してゐるが、これを現に在學中の兒童に比較すると尋常小學校卒業の學歷をもつものに於て低下の著しいものもあり、高等小學校卒業の學歷に於てはそれが僅少であることを示してゐる。此等の事實は青年後期教育充實の必要を示唆するものである。

四. 國語に於ては單純な文章の問題、漢字の讀み方は低度の學歷の者に於ても相当熟達してゐるが、書取では高き學歷のものに於ても熟達してゐないことが表れてゐる。併しこれを現に在學中の兒童の現有學力に比較すると、書取は各學歷のものを通じて低下しないが、文章、語の使用に關する問題に於ては各學歷共低下が著しい。」

つぎに、1932年（昭和7年）以後の、0点、満点をとった者の%と「學歷なし」（小學校へも行かなかつた者）の%とを合わせて示す。

| 年次<br>得点 | 1932 | 1933 | 1934 | 1935 | 1936 | 1937 | 1938 | 1941 |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 0点       | 5.6  | 8.2  | 4.6  | 5.3  | 7.8  | 4.7  |      |      |
| 満点       | 19.2 | 15.7 | 21.0 | 38.6 | 13.0 | 4.9  |      |      |
| 學歷なし     | 0.64 | 0.54 | 0.50 | 0.44 | 0.38 | 0.36 | 0.34 | 0.38 |

§011.1 カナモジカイの調査

カナモジカイが1935年（昭和10年）以後にした調査は四つある。

1 1935年3月（8日～16日）、東京の、卒業まぢかの高等小學校2年生男女10学級（うち5学級は新市内、5学級は旧市内）の計425人について、漢字の“読み”の力を調べた。東京の銀座の看板の文字（おなじ年の2月1日現在）から50問、おなじ年の3月1日発行の五つの新聞の見出しの文字から50問、計100問を60分のあいだに読ませた（ふりがなをつけさせた）のである。その結果、全部の生徒が読めた文字はひとつもなく、また逆に「闡明」は425人のうちひとりしかできなかった。100問中よくできたのは、「裁縫」、「財布」であり、できなかったのは「闡明」、「神憑り」、「更迭」である。

2 1937年（昭和12年）1月に、昭和11年兵（1916年（大正5年）生まれ）と

してとられた壯丁 809 人について、漢字の“書取り”の力を調べた。809 人の壯丁は兵種、地域によるかたよりがないように sample され<sup>1)</sup>ている。問題は、1936 年に、義務教育を終るまえの生徒について調べた文字から、1~2%しかできなかった漢字からひとつ、3~4%できた漢字からひとつというようにして 50 字を選んだ。「上」、「大」、「森」にはじまり、「悉」、「賜」、「憤」、「棒」に終る 50 字である。その結果は、平均 61.1 (100 点満点)で、1926 年の小学校卒業者の平均 50.5 より少し成績がいいが、壯丁のうちには、中学校、高等小学校卒業の者がふくまれており、しかも、壯丁のうち尋常小学校卒業者の成績は 50%に達しない。つまり、尋常小学校を卒業しただけの者は、学校を出てから入営するまでに、覚える漢字よりも忘れる漢字のほうが多いことが明らかとなった。

1) §113.0 を見よ。

3 1941 年 (昭和 16 年) に、東京の五つの小学校 (住宅地帯の学校 1, 商業地帯 2, 工業地帯 2) の高等小学校卒業まじかの生徒 2,242 人について、漢字の“読み”の力を調べた。問題は、銀座と新宿との看板、ポスター類からとった 50 語。その結果、「餅」の正しく読めた者 97.9%、「履物」93.4%、できなかったのは「貼紙」7.4%、「絃台」5.3%。

上に述べた 1 の調査と、調査語の一致するものがある。正答率を%で示す。

|   | 海苔 | 紳士 | 衣裳 | 鼈甲 | 佃煮 | 殿方 | 骨董 |
|---|----|----|----|----|----|----|----|
| 1 | 91 | 89 | 75 | 76 | 75 | 54 | 40 |
| 3 | 86 | 84 | 71 | 62 | 56 | 47 | 41 |

おもしろいことに、おなじ語のそれぞれの成績は違うけれども、むずかしさの順はほとんど一致し、しかも、それぞれの成績がかなり近よっている。

4 1945 年 (昭和 20 年) 12 月から翌年 1 月にかけて、カナモジカイは、連合軍総司令部民間情報教育部 (CIE) ホール (Robert Hall) 氏の依頼を受けて、東京都 (10 工場)、神奈川県 (2 工場)、埼玉県 (1 工場)、千葉県 (1 工場) の工員約 1,700 人 (うち集計に使われたのは 1,453 人) について、漢字の“読み”の力と文の理解力とを調べた。問題は、総司令部発表 (当時新聞にものった) の「奉天事件よりミズリー停戦協定調印まで」(翻訳文) から漢字をふくんだ 20 語およびふたつの文で、これは、「フリガナヲシテ クダサイ」、「次ノ 文ノ 意味ヲ 説明シテ クダサイ」のように要求し、テストの時間はほしだけあたえた。

漢字の 20 語はつぎのとおり。

確執 提携 傍観 掲げて 意嚮 襲はれ 富裕 脅威 悩んで 軌道 軌轢

§ 0 調査の目的と今までの調査

已むなき 挑戦 憎悪 遭って 傀儡 拡張 喚起 見做す 勃発

ふたつの文はつぎのとおり.

喧伝された程の効果はなかった.

政党政治の弔鐘を奏でた.

成績については、つぎのように、平均得点と学歴との高い相関関係を見ることができ.

|         | 小学校卒高小中退 | 高等小学校卒 | 中学校中退 | 中学校卒以上 |
|---------|----------|--------|-------|--------|
| 漢字の“読み” | 32       | 55     | 70    | 85     |
| 文の理解    | 6        | 17     | 38    | 59     |

§011.2 東京市の読方教育測定

東京市教育局が1933年(昭和8年)3月にした調査はかなり大がかりなものである。東京市内の小学校15校をいろいろな地域の代表であるように選び、尋常科1年生から6年生にわたって計180学級、約9,500人について、漢字の“読み”と“書取り”, 語の意味, 文の意味の理解の能力を調べた。問題はすべて教科書からとられ、テストの時間は制限しなかった。結果のうちおもしろいのは、漢字の“読み”は、各学年「J字型」<sup>1)</sup>の分布を示すが、漢字の“書取り”は、1年生, 2年生については「J字型」であるが、4, 5, 6年生については「一の字型」<sup>2)</sup>の分布を示すことである。報告は、『東京市編読方教育測定』(1935年2月)として発表されている。この調査は、日本の今までの読み書き能力調査のうちで、もっとも科学的なものであると認められる。

1) のちにも述べるが、おおざっぱに言って、点のいいものが圧倒的に多く、点の悪いものが少しあり、そのあいだのものが少ないような分布。

2) いろいろなしるしについて、そのしるしを持つものの大きさ(数)がすべて一様であるような分布。一様分布ともいう。